

イギリスにおける経済学史研究の形成*

——1870年代-1920年代——

西 沢 保

I はじめに

シュンペーターは『経済分析の歴史』第4編で、「1870年から1914年まで（およびそれ以降）」を扱う際に、次のように始めている。「社会改革への新しい関心とか、「歴史主義」の新しい精神とか、経済「理論」分野での新しい活動とかがその力を発揮しはじめたのは、まさに1870年の頃で」あった。そして、この頃に「伝統との断絶が明確に現れた」という（Schumpeter 1954, 753 / 訳（下）3）が、新古典派経済学と歴史学派に代表されるこの時代の歴史主義、歴史的方法が、この時期における「経済史学の形成」と同時に経済学史研究形成の大きな基礎になっているように思われる。シュンペーターは、歴史、統計、理論という経済分析の基本領域のなかで、経済史が「断然もっとも重要」であり（ibid., 12 / 訳（上）20）、経済学者は「経済史の大洋のなかに身を投じ、その風韻雅致を賞味することを学ぶべきである」（ibid., 807 / 訳（下）107）と述べている。

シュンペーターによれば、この時代のイギリスは「断じてマーシャルの時代であった。マーシャルの成功は、アダム・スミスのそれと等しく大きなもので、「マーシャルはリカードがかつてそうであったよりも遥かに多くの舞台を現実に征服した」（Schumpeter 1954, 830, 832-33 / 訳（下）151, 155-56）。シュンペーターは『十大経済学者』の「マーシャル」で、刊行後50年の『経済学原理』を評価し次のように述べている。「『経済学原理』の」心髄の背後に、その上に、そしてまたその周囲には、19世紀イギリス資本主義の経済社会学、きわめて広汎堅固な歴史的基礎の上に立った経済社会学が存在する。事実マーシャルは第一流の経済史家であり、ただ彼には歴史の専門家らしいところがあまりなかっただけである。そして彼の歴史的事実への精通と彼の分析的な習性とはバラバラでなく、極めて密接に結合して生きた事実が定理のうちに入り込むとともに

* 本稿は、第74回大会の共通論題「経済学史の形成」で報告したものを大幅に加筆修正したものである。本稿の作成にあたり、JSPS科学研究費、基盤研究A「ケンブリッジ、オクスフォード、LSEの経済思想と現代福祉国家の変容」（課題番号25245032）の助成を受けた。

に、定理が純粹に歴史的観察のうちに入り込んでいる。このことはもちろん『原理』よりも『産業と商業』のうちに非常に明瞭に現れている。…一つの現実主義がアダム・スミスのそれ——唯一の比肩しうる例——を遙かに超えて達せられたのである」(Schumpeter 1951, 94 / 訳 137)。

シュンペーターがここで言う経済史は、歴史であり狭義の経済史ではないのであるが、後に経済史家の N. B. ハートは、学科としての経済史がイギリスで隆盛を誇った 1970 年代初めに、経済史教授職への就任講演 (1893-1970 年) を集め、それに「経済史学の形成」という長い序文を付して出版した。それによれば、イギリス (イングランド) 経済史は 19 世紀最後の 4 半世紀に「離陸」し、その主要な担い手はサロルド・ロジャーズ、トインビー、アシュリー、およびカニンガムという歴史派経済学者であった。アシュリーは、ハーヴァードで英語圏最初の経済史教授になったが、イギリスで最初の教授職はマンチェスターのアンウィン (1910 年) であり、次は LSE のリリアン・ノウルズ (1921 年)、そしてケンブリッジではマーシャリアンのクラップムが 1928 年に教授になった。19 世紀末に離陸した経済史学は、20 世紀最初の 4 半世紀、すなわち 1926 年にアシュリーを会長にイギリス経済史学会が設立され、R. H. トーニーとリブソンの編集で *Economic History Review* が創刊される翌年までに「成熟への前進」期を経過したのであった (Harte 1971)。ちなみに日本の社会経済史学会は 1930 年に創設され、翌年から『社会経済史学』が刊行されている。

また、『ニュー・パルグレーヴ』(1987 年) の「イギリス歴史学派」という項目で、マローニは次のように述べている。それは 1875-90 年に全盛を迎えた経済学者のグループで、主要な人物は、上述の 4 人の歴史派経済学者に加えて、アイルランドのイングラムとクリフ・レズリー、およびヒュインズである。フォクスウェルや L. L. プライスも加えられるかもしれない。1890 年はマーシャルの『経済学原理』によって大きな画期となるのであるが、J. S. ミルの死 (1873 年) から、「政治経済学」でなく「経済学原理」の出版までの時期に全般的な思潮とより調和していたのは、限界理論ではなく歴史主義であった (Maloney 1987, 147-49)。繰り返しになるが、これが経済史と同時に経済学史の形成の大きな母体であったと思われる。メイトランド、シーボウム、ヴィノグラドフらの研究もこの時期に胚胎するが、イギリス経済史研究が根づいたのは、方法論争後のこの歴史主義の時代であった。政治経済学から経済学が蟬脱していくなかで、政治経済学→歴史派経済学の内部では、独立の領域として経済史が生まれようとしていた。イギリスで経済史は大学に制度化し学会も設立されるが、経済学史・経済思想史が大学に正規のポストとして置かれることはこの時期にはなかった。本稿では、政治経済学が経済学になり、ケンブリッジの経済学トライポスのように経済学が制度化され、経済史が科目として独立していくなかで、経済学史・経済思想史は如何様であったかを概観しその特徴を示したい。

グッドウィンは、『ニュー・パルグレーヴ』第 2 版 (2008 年) の「経済学史」の項目で、その発展を 5 つの時期に区分し、第 1 期「啓蒙期」、第 2 期「古典派経済学」に続く第 3 期を「新古典派と歴史派経済学」として、それを経済学史の文献的研究の時期としている。本稿ではこの第

3期を中心に経済学史研究の形成とその特徴を検討するが、グッドウィンは、それに続く第一次大戦後から1950-60年代までを第4期「黄金期」、[発見的装置としての経済学史] (HET as heuristic device) の時期としている。そして第5期の1960年代以降は、「経済学史という経済学の新しい一分野の構築」期で、独自のジャーナルや学会が創設されて(日本の経済学史学会は1950年に創設)、我々にもなじみの深い時期となる。しかし、時代が新しくなるにつれて、分野として制度化された経済学史は、バックハウスの論文「イギリスにおける経済学史、経済学および経済史、1824-2000年」も言うように、経済学という領域のなかで「周辺」に追いやられてきた(Backhouse 2004, 107)。

グッドウィンが言う「黄金期」の著者には、シュンペーター、ハーバラー、ヒックス、ロビンズ、ステイグラ、ヴァイナー、スラッファ、ジャッフェ、ミッチェル、ミュルダール、あるいはケインズ自身さえもいた。彼らはもちろん卓越した経済学者であり、経済学史を「新たな発見を促す重要な」「分析手段」と考えて用いたのであり、経済学史は、理論や実証と同じように経済問題への際立ったアプローチで、経済学の革新に大きな役割を果たしていた(Goodwin 2008, 52)。

II 経済学の危機と歴史への回帰

グッドウィンの「経済学史」によれば、第2期「古典派経済学」は「系譜図と学說的浄化のための経済学史」の時期であった。それに対して、第3期「新古典派と歴史派経済学」の経済学史は渉獵する「文献研究」であり、正統への息苦しい盲従でなく、正統から離れて自由に新しい見方や理論を検証する時期であった。それはマカロックらがしたように堅固な正統を証明するための歴史研究ではなかった。イギリスにおける経済学史の系統的な研究は、マカロックの *Discourse on the Rise, Progress, Peculiar Objects, and Importance of Political Economy* (1824) に始まるというが、『経済学原理』(1825年)のなかでも「科学の興隆と進歩」という章を設けている(Backhouse 2004, 108)。また古典派の時期の経済学史として、Travers Twiss, *View of the Progress of Political Economy in Europe since the Sixteenth Century* (1847) があげられる。いずれも進歩の歴史であり、総じて、初期の誤った学説が正されて古典派の正統的な学説に向かう進歩の歴史であった。マカロックの主要な目標の一つは誤謬と真実を区別することであり、そうすることによって経済学はしかるべき名声と影響力をもてるのであった。いわく、「経済学が以前に感染していた誤謬は、今や急速に無くなりつつある。経済学が真に、事実と経験に基づくあらゆる科学がなすような確実性をもって結論を導くことができることは、ごくわずかな言葉で示すことができる」(Goodwin 2008, 50; Backhouse 2004, 108-09 に引用)。

マカロックの言から4半世紀たった19世紀中葉、1851年の万国博覧会以降の「ヴィクトリア朝の繁栄」期に、イギリス古典派経済学は政策、理論、方法において「至上の権威と信頼」を勝

ち誇り、1860年の英仏通商条約の頃レッセ・フェールはその頂点に達していた。イギリス古典派経済学は「その母国で、その経済史が活気をもち勝ち誇っていた時期に、他のいかなる経済思想も比肩できないような影響力、支配力、および権威をもった」(Hutchison 1978, 58-59 / 訳 69-70)。イギリス中心的な思想的ショーヴィニズムは、「最後の古典派経済学者」と言われたJ.E. ケアンズがユニヴァーシティ・カレッジ (ロンドン) で行った序講「経済学と自由放任」(1870年)の冒頭にも顕著であった。また『国富論』100年記念(1876年)は、経済学クラブによって盛大に祝福され、『タイムズ』紙も「自由貿易が学説をこえて事実として確立したことはおそらく真実である」と書いた。しかし、同じ1876年にジェヴォンズがユニヴァーシティ・カレッジ (ロンドン) の教授就任講演「経済学の将来」で述べたように、経済学は「ほとんど混沌状態」にあった。バジヨットも「イギリス経済学の基本公準」(1876年)で、100歳になったイギリスの経済学が「人々の頭のなかで死にかけている」と書いた。1877年にはイギリス科学振興協会から「経済学・統計学部門」を除く提案がされ、翌年イングラムもF部門の会長就任講演で経済学の「危機」を表明した(西沢 2007, 25-28)。

『国富論』100年を記念する経済学クラブの討論会にはベルギーの歴史派経済学者ラブレーやオクスフォードのサロルド・ロジャーズもいた。ロジャーズは、リカード以降の経済学者がスミスの方法に依拠していたなら多くの誤謬と不信を避けられたであろうと述べた。またジェヴォンズが「ヨーロッパにおける最も優れた経済学者の一人」と呼んだラブレーは、リカード派の解体によって生じた経済学者の分裂と新しい経済学研究の潮流を明示した。彼によれば、「講壇社会主義者」とあだ名され、より適切に「歴史学派」あるいは「実証主義派」(Realist School)と呼ばれるべき新しい経済学者群が、ドイツを筆頭にイタリア、フランス、そしてイギリスで興隆していた。歴史学派、歴史・倫理学派、あるいは歴史・社会学派の興隆であり、新古典派経済学の興隆とともに、この時代を経済学の歴史における新しいパラダイムにした。ジェヴォンズもこの討論会を振り返って「経済学の将来」(1876年)を展望するなかで、スミス以降、経済学を歴史的に論じようとする優れたイギリスの経済学者の系譜があったことを示した(西沢 2007, 28-29)。

ケアンズは、「経済学は本質的にイギリスの事業であり、同時代のフランスやドイツの思想はほとんど何の注目にも値しない」ということに疑問を抱いていなかった(Checkland 1951, 149)というが、19世紀中葉におけるイギリスの経済学・経済学界の島国性はしばしば指摘されてきた。そのような島国性、思想的ショーヴィニズムの支配こそ、ジェヴォンズが見たイギリス経済学の状態であり、1860年代後半におけるバジヨット、クリフ・レズリー、ジェヴォンズ、そして若きマーシャルのような「新しい経済学者群」が登場する背景であった。マーシャルはバジヨットを、イギリスの経済学者のなかで「最も有能な最も心の広く聡明な人の一人」と見ていたようで(Hutchison 1953, 67 / 訳(上) 79)、「イギリス経済学の基本公準」を「経済学史の画期的な著作」と見て、ケンブリッジの学生のために編集・校訂して出版した(Marshall 1885, v)。バジヨットの「イギリス経済学の基本公準」もそうであるが、それを含む『経済学研究』(1895年)も一つ

の経済学史研究と見ることができる。

III ジェヴォンズとフォクスウェル

歴史的・経験的科学 限界効用理論で知られるジェヴォンズは、その論理的・分析的能力とともに、マーシャルのように「経済学者にとって必要な素質と思われる多面的な才能」をもっていた。太陽黒点説でも知られる景気変動、物価に関する帰納的研究に加えて、「異常に強い歴史的性癖、好事家的性癖」があった。彼にはごく初期から、帰納的研究を年代的に遡らせ、彼が興味を抱いていたどんな理論でもその歴史的起源を見究めたいという生来の嗜好があった。彼は、景気循環の歴史を辿り、何世紀にもわたって収穫統計を調査し、「経済史の分野、物価史及び景気変動史の開拓者」になった (Keynes 1972, 139 / 訳 187)。ジェヴォンズは、「自然科学者の穿鑿的な眼と豊かで制御された想像力をもって資料を検討した最初の理論経済学者」であった。いつも図表を按配したり作図したり、それを精査したり、それらのもつ秘密を発見しようとして、ずっと見つめて考え込みながら何時間も費やした (ibid., 119 / 訳 159-60)。もともと論理学者でしかも演繹の経済学者でありながら、こうしたやり方で問題に接近したということは「革命的な変化」であった。こうした方法を用いることによって、ジェヴォンズは経済学を先験的な道德科学から、確固たる経験の基礎の上に築かれた自然科学の方向へ大幅に推し進めた (ibid., 127 / 訳 170)。

ジェヴォンズは、経済学の歴史には一層深い関心を持ち、自分が手を染めた経済学の領域でまだ知られていない、あるいは忘れられた先行者を探しだした。その顕著な例がカンティロンの「発見」(“Richard Cantillon and the Nationality of Political Economy,” *Contemporary Review*, 1881) であった。この「発見」をうけてカンティロンと重農主義者の研究を進めたヒッグズは、「経済理論史においてこれほど素晴らしい文献研究の例はない」と述べている (Higgs 1905, x)。ジェヴォンズは経済学の文献目録でも重要な先駆的業績を残し、ワルラス、コッサ、フィッセリングの協力を得て、数理経済学に関する書誌目録 (“Bibliography of Works on the Mathematical Theory of Political Economy,” 1878) を作成し、『経済学の理論』第2版に収録した。またフォクスウェルの協力で貨幣・金融問題に関する書誌目録を作成し、景気循環、物価変動の著作をまとめた『通貨と金融の研究』 (*Investigations in Currency and Finance*, ed. with introduction by Foxwell, 1884) に収録された。フォクスウェルは1874年に若くしてケンブリッジの道德科学トライポスの試験官に任命され、同じように試験官であったジェヴォンズとそれ以来親しい交友関係を結んだ。1876年から任命されたユニヴァーシティ・カレッジ (ロンドン) の教授職も、ジェヴォンズが前任のマンチェスター、オウエンズ・カレッジとの関係でその椅子に就く前に、フォクスウェルが代わって講義をし、1881年にはジェヴォンズの後を受けてフォクスウェルがその教授に任命された¹⁾。

1) この1881年の暮れ、ジェヴォンズは『通貨と金融の研究』をまとめ始めた直後にフォクスウェルをケンブリッジに訪ねた。ジェヴォンズの急死の後1882年に、フォクスウェルはその完成を依頼され、書

ジェヴォンズは生まれながらの収集家で、ケインズが言う「経済学獵書家の著名な一党の最初の人」であった。彼は無名の経済書やパンフレットの収集を思いつき、「この病を最初にうつされた」のがフォクスウェルであった (Keynes 1972, 140 / 訳 188)。彼はマーシャルの親しい同僚で、ロンドン大学との深い関わりにもかかわらずケンブリッジを離れたことがなかった。両方での仕事に加えてたえず細事に関わっていて、持続的な作品に集中する機会はなく、独自の著書を完成させることはなかった。独創的な著作である『雇用の不規則性と物価の変動』(1886年)も、それがさらに展開されることはなかった。彼の論文の多くは通貨と金融に関するものであったが、「最も重厚で重要な仕事」はアントン・メンガーの『労働全集権論』(1899年)の英訳に序文として付された100ページにおよぶイギリス初期社会主義者に関する解説であり、その巻末に付された80ページの文献目録であった (ibid., 278-79 / 訳 368)。前者はイギリス初期社会主義思想史、リカード派社会主義に関する貴重な先駆的な研究であろう。

フォクスウェル：経済思想と文献書誌の歴史 ケインズによれば、大作 (magnum opus) に対するフォクスウェルの最初の計画は、アダム・スミス『国富論』の決定版をつくることであった。ジェヴォンズも学生のために「アダム・スミス選集」を出版しようとしていたようで、1880年9月、フォクスウェルはジェヴォンズに「貴兄のアダム・スミスがうまくいくことを願っています」と書いていた。フォクスウェルは文献書誌学に卓抜な知識をもち、主著を完成できたとしても、金融と通貨に関するものではなく、「経済思想と文献の進歩に関するもの」であったろうとケインズは言う。それがケンブリッジにおける彼の初期の講義の主題であったし、「書誌学的な研究のおかげで、彼はその卓絶した学識を、歴史的洞察力や正統派経済学の束縛に抗してあらゆる異端者に示した格別な共感に結びつけることができた」(Keynes 1972, 281 / 訳 371)。

マカロックは古典派の時期に経済学史を書いたし、経済的小冊子類の相当な収集家でもあった。しかし、バルグレーヴ『経済学辞典』の「経済学文庫」でフォクスウェルが言うように、マカロックの取書は、「稀に例外はあっても、正統的学説に関わる彼の基準に達しない一切の書物を除外した」という。ジェヴォンズは、こうした基準の軛を離れて自由に文献を集めた最初の取書家であり、フォクスウェルがこの趣味に感染したのはジェヴォンズからであった (Keynes 1972, 283 / 訳 374)。ジェヴォンズとフォクスウェルのこうした作業・営為は、この時代を大きく特徴づけるものであり、経済学史研究の基盤形成であったように思われる。取書の目的は「様々の意見を映し出すことであって、判断を下すことではなかった。…少数意見も流行の意見と同じよう

物は1884年に出版された。その後フォクスウェルは、ジェヴォンズが the work of his life と考えていた『経済学原理—社会の産業機構についての一論』の断片をつなぎ合わせて校正刷りまでもっていくのに多大の時間をかけた。それは1887年秋に印刷中で冬には出版の予定とアナウンスされたが、フォクスウェルの序文を待って出版されず、結局、ジェヴォンズの「カンティロン」論や「経済学の将来」などをも含む『経済学原理』(*The Principles of Economics: A Fragment of a Treatise on the Industrial Mechanism of Society and Other Papers*)として、ヒッグズの序を付して完成公刊されたのは1905年であった (Higgs 1905; Keynes 1972, 276-77 / 訳 365-66)。

に忠実に取り上げられ、何らの基準も課されなかった」(Foxwell 1923-26, 871)。ゴールドスミス文庫になったフォクスウェルの収書の始まりは1875年で、グレート・ポートランド街の露店の古本屋で、ジェヴォンズがフォクスウェルにラードナーの『鉄道経済論』を買うよう説得した時であった。それ以後60年間にフォクスウェルは7万冊を超える書物を手に入れた。古書目録の閲読、新しく見つけた書物の選択、購入、通読、そしてそれらに注釈を付し目録を作成し製本することが、多年にわたって彼の時間と思考の大きな部分を占めるようになった。

「二度と再び収集することのできないような、最初の最もすばらしいコレクション」は、ロンドン大学に寄贈するために1901年にゴールドスミス商会によって買い取られた。フォクスウェルの「理性と嗜好の宝物」であるゴールドスミス文庫がロンドン大学に所蔵・保管される経緯はかなり複雑だったようで、1915年以降、フォクスウェルは委員を辞してそこを訪ねることがなかった(Keynes 1972, 285-86 / 訳 376-77)。このコレクションは「『国富論』の完全な歴史的版本」のために資料を整える目的で、1880年頃に真剣に開始された(Foxwell 1923-26, 870)。既述のように、それを彼の主著にしたいというのがフォクスウェルの意向であった。フォクスウェルの意向の詳細は分からないが、アダム・スミスと『国富論』の復活はこの時期に大きな目標の一つとされていたようで、『国富論』の歴史的版本は、周知のように1904年にキャナンによって完成された。それはこの時期における経済学史研究の一つの頂点のようにも思われる。すでにキャナンは発見された講義ノートをもとにスミスの『法学講義』(1896年)を出版していた。またジェームズ・ボナーの『アダム・スミス蔵書目録』が1894年に、翌1895年にはジョン・レーの『アダム・スミス伝』が、そして1900年にはW. R. スコットの『フランシス・ハチソン』が出版されていた。1896年にはグラスゴウ大学にアダム・スミス教授職が設けられ、最初はウィリアム・スマート、その後にスコットが就任している。ボナー、レー、スマートはオーストリア学派の著作の英語圏への紹介でも知られているが、彼らはこの時期の「アダム・スミスの世界」の中心にいた(Shirras 1941, 145)。

フォクスウェルはその後、「産業革命に対するトインビーの特別な関心によって、その使用に供するために、1760-1860年の時代にわたる資料を収集するようになった。…やがて文庫は一般的な性格を帯びるようになり、イギリスの歴史に関する限りかなり完全な、またある面では、外国の動向についてかなり代表的なものにしようとする努力が払われた。」「経済思想の歴史は、イギリスに関する限りほとんど完全であり、また革命期以前およびその間のフランスの経済学者についてもきわめて充実したものである。…何らかの偏りがあるとすれば、それは、ほとんど物を言うすべを知らない人民大衆の思想に手掛かりを与える、乏しい世に知られない文献、しかもおそらく未来の時代にとって、非常に特殊な情緒的な関心を引くと思われる文献を明らかにしたいという願望によるものであった。」それは、「他の誰よりも経済学史家にとってより大きな価値をもつものであった」(Foxwell 1923-26, 871)。ケインズによれば、そのコレクションは、「終局性の幻想にむかって進む経済哲学者たちの堂々たる進歩からはるかにかけ離れて、その中から現代の世界が生まれた、社会的激痛や混乱した思考を記録する仕事を双肩に担うべき未来の歴史家に

として資料となるように、はっきりと定められていた」(Keynes 1972, 287 / 訳 378)。

クレス文庫として知られるようになったハーヴァード・コレクションは、経済制度の歴史と発展にも強いというが、こうしてフォクスウェルの営為による二つのコレクションによって、経済学史・経済思想史、そして広く歴史研究の文献的基礎が構築された。

ヒッグズ ジェヴォンズが「発見」したカンティロンの研究は、ロンドンでフォクスウェルの教えを受けて経済学に進んだヒッグズによって進められた。ヒッグズはカンティロンと『商業試論』について論文を書き、経済学史へのヒッグズの最も重要な貢献とも言われるカンティロン『商業試論』の標準版 *Essai sur la nature du commerce en général by Richard Cantillon, edited with an English translation and other material by Henry Higgs (1931)* を編集・校訂した。彼には重農主義者についての著書 *The Physiocrats: Six lectures on the French Économistes of the 18th Century (1897)* もあり、ヒッグズは 18 世紀フランス経済学史の開拓者であった。また彼は、フォクスウェルが手掛けて完成に至らずに眠っていたジェヴォンズの *The Principles of Economics: A Fragment of a Treatise on the Industrial Mechanism of Society and Other Papers (1905 年)* を編集・出版し、パルグレーヴの『経済学辞典』の再編・出版 (1923-1926 年) にも大きな貢献をした。中央の公務員・官僚であったヒッグズは統計にも長け、イギリスの家計に関わるチャールズ・ブースらとの共同研究があり、ル・ブレの家計、労働統計の研究に刺激されていたヒッグズの最初の論文は“Frédéric Le Play” (*Quarterly Journal of Economics*, 1890) であった。

フォクスウェルがロンドン大学で長年教えたことから得た最大のものは、初期の学生の一人であるヒッグズの生涯にわたる友情と献身であったという。およそ 50 年にわたって、ヒッグズとフォクスウェルは、その趣味と関心と仕事を共にしていたが、フォクスウェルの晩年の数年間、ヒッグズが『経済学文献書誌』 *Bibliography of Economic Literature* の編者となったことは、両者の関係をいっそう親密にした。この書誌はおもにフォクスウェルのコレクションに基づくもので、その最初の巻『経済学文献書誌 1751-1775 年』(1935) はフォクスウェルの存命中に公刊された (Keynes 1972, 277, 307 / 訳 366-67, 404-05)。

また、ヒッグズよりも 10 年余り年長のジェームズ・ボナーには、『アダム・スミス蔵書目録』の他、2 冊のマルサス研究 (*Parson Malthus, 1881: Malthus and His Work, 1885, 2nd ed. 1924*)、さらに *Letters of David Ricardo to Thomas Malthus 1810-1823 (1887)*、*The Tables Turned: A Lecture and Dialogue on Adam Smith and the Classical Economists, 1926* などの経済学史研究があり、ボナーはとくにスミス、マルサス研究に優れていた。ボナーはアメリカ (ジョンズ・ホプキンズ) のジェイコブ・ホランダーと *Letters of Ricardo to Hutches Trower (1899)* も編集しており、ホランダーはリカード研究で著名で、リカード書簡の編纂の他に、*David Ricardo: A Centenary Estimate (1911)* があった。イギリスでは、オクスフォード時代のマーシャルの教えを受けた E. C. K. ゴンナーによるゴンナー版のリカード『経済学及び課税の原理』 *Principles of Political Economy and Taxation,*

by David Ricardo (1891 年) が出ている。

彼らはイギリス経済学会（王立経済学会）の主要メンバーで、ヒッグズはエッジワースとともに『エコノミック・ジャーナル』の共同編集者も務めた（1892-1905 年）。ヒッグズもボナーも公務員・官僚としての職務も多く、ゴンナーも含め、経済学者であった彼らの著作には経済学史研究でないものも多い。経済学史という大学の専門職はなかったが、この時代における経済学史研究の形成は明らかのように思われる。

ジェヴォンズの経済学史 1875 年にジェヴォンズはフォクスウェルに宛てて書いた。「経済学の真の道筋がスミスからマルサスを経てシーニアに伝わっているのに対して、リカードを経てミルに至るもう一つの文脈は、それが真理を有するのと同じくらい大きな誤謬をこの科学のうちにもたらしたという考えが非常に強くなり始めています」（Keynes 1972, 136 / 訳 183）。『経済学の理論』第 2 版（1879 年）への長い序文は、ジェヴォンズの『経済学の理論』に向かう経済学史とも言える。そこで彼は、リカード以後のイギリスにおける経済学の理論的展開における狭隘な島国性に対する強い不満を表明した。「イギリスでリカード派の経済学者に賦与されてきた排他的重要性は、多かれ少なかれ厳密に数学的な仕方です学を取り扱った一連のフランスならびに少数のイギリス、ドイツ、イタリアの経済学者の存在を知るのを妨げてきた」（Jevons 1879, xvi ii）。マルサスやシーニアのような経済学者は、「リカード=ミル派の統合された影響力」によって舞台の外に追いやられた。「経済学の真の体系が確立されるに至った暁には、有能ではあるが誤った考えの持ち主であるリカードが経済学の車両を間違った軌道にそらせたことが判明するだろう。しかしこの軌道は、同じく有能で間違った考えの、リカードの讚美者ミルによって、経済学の車両がその上をさらに一層の混乱へと押しやられた軌道なのである。…壊滅した科学の断片を拾い上げて新たに出発するというは、骨の折れる仕事であろうが、それは少しでも経済学の進歩を見たいと願う者が回避してはならない仕事なのである。」ジェヴォンズが「明瞭に近づきつつある結論、経済学の真の体系に到達する唯一の希望は、リカード学派の迷路のような非常に馬鹿げた仮定を永久に放棄することである。我々イギリスの経済学者は愚者の楽園に住んでいた。真理はフランス派の側にあるのであり、我々がそのことを早く認識すればするほどそれは全世界にとってよりよいことであろう」（ibid., li-ii, xlv; Keynes 1972, 136 / 訳 183）。真理はフランス派の側にあるとして、ジェヴォンズはデュピュイ、クールノー、そしてドイツのゴッセン、チューネンらの理論史を書いた。ジェヴォンズは、経済学の歴史における数理経済学の流れと効用理論の流れを合流させて、自らの「真の体系」のなかに統合しようとした（井上 1987, 184 参照）。

なお、ジェヴォンズの息子 H. S. ジェヴォンズによる以下の説明は、ジェヴォンズの効用理論の系譜、マーシャルとの根本的相違を指摘していて興味深い。それによれば、ジェヴォンズのアプローチは「心理学的経済学派」の創設者ベンサムから出ている。『経済学の理論』にはそれが広く引用されていた。またシーニアに負うところが大きく、この心理学的経済学派はイギリスでさまざまな著者に引き継がれ、オーストリア学派によって展開されたが、それは、ミル=マーシャ

ル学派とはまったく思考を異にする学派であった。ケインズはジェヴォンズとマーシャルのアプローチの類似性を指摘しているが、そうした類似性はまったくない。経済学の数学的取扱いという点では同様であるが、基本的な仮定や議論の真の基礎を見るなら、それらは「まったく違ったもの」であった (Keynes 1972, 152-53 / 訳 204)。

ジェヴォンズは、「通貨の数学的理論」の構築を試みた *Essay on the Theory of Money* (London, 1771) という著作について、以下のように書いている。この著作はイギリスでまったく忘れ去られていた。マカロックも他のイギリスの経済学者も誰もそれに触れていない。ジェヴォンズはそれを偶然本屋で見つけたが、「わが国でまったく知られていないイギリスの著作が外国で知られていることに気づくのは、イギリス人にとって恥ずべき」であった。彼は、この著書がヘンリー・ロイド少将なる人物によって書かれたことを、ドイツ歴史学派のロツシャーやシュタインのもとで学んだイタリアの歴史派経済学者コッサによって知った。コッサの *Guida allo Studio di Economia Politica* (1876) は、明治期の日本でも英訳から翻訳されて広く読まれたが、それはジェヴォンズによれば、「簡潔で思慮深く書かれた教科書」で、「わが国の経済学の島国的狭隘さについて我々を開眼させるのに十分」であった (Jevons 1879, xli-xlii)。

ジェヴォンズはコッサの著書の英訳を勧めたようで、*Guido* 第2版 (1878年) の英訳 (*Guide to the Study of Political Economy*, 1880) に序文を寄せて次のように述べている。この著作は一冊で、経済学の定義、分野、他の諸科学との関係などを概観するだけでなく、「イギリスの読者にはまったく新しい経済学の歴史的素描」を提供していた。イギリス中心的なショーヴィニズムと語学力の不足が相まって、イギリスの経済学者はフランスやイタリアの経済学者の偉大な著作、および近年のドイツの非常に貴重な著作をあまりに無視してきた。発達したイングランドの複雑な産業構造をあたかもそれが自然的で最高の組織であり、諸外国はその達成に失敗してきたとみなす不可避的な傾向があった。イングランドの土地制度がたとえイギリス農業には最適な形態だとしても、それが必然的に世界の他の地域にも最善だという考え方は放棄すべき時が来ている、とジェヴォンズは書いている (Cossa 1880, vii-x)²⁾。

IV マーシャルとフォクスウェル

マーシャルの経済学史 マーシャルは「旧派の経済学」に対して、ジェヴォンズや歴史学派の批判者と同様に、大いに批判的になる用意があったし、「イギリスの経済学が経験してきた島国性の払拭」に大いに貢献した (Hutchison 1978, 234-35 / 訳 262-63)。マーシャルは『経済学原理』

2) コッサの *Guida allo Studio di Economia Politica* (1876) の増訂第2版 (1878年) の英訳本 *Guide to the Study of Political Economy* (Macmillan, 1880) はフォーセット夫人に捧げられ、巻頭にジェヴォンズの序文がある。英訳は英語圏でよく読まれたようで、コッサによる改訂第3版の英訳が、*An Introduction to the Study of Political Economy*, translated by Louis Dyer, Macmillan, 1893 として出ている。

の付論 A「自由な産業と企業の成長」で経済的自由主義の発達を論じ、付論 Bで「経済学の発達」を述べている。周知のように、付論 A, B は、『原理』第 4 版までは、第 1 編第 1 章序論に続く第 2, 3 章であった（福田徳三のマーシャル理解はこの構成を踏襲している）。およそ正統的・新古典派的な経済学者の著作で、マーシャルほど歴史的素材を扱ったものは、スミスを例外として後にも先にもなかったという（Collini et al. 1983, 322 / 訳 277-78）。付論 B はマーシャルの経済学史とも言えようが、クリフ・レズリー、バジヨット、トインビー、ジェヴォンズらの研究に見られる新しい潮流は、「全西ヨーロッパ世界に及んでいる広範な動きの一側面にすぎない」のであった。歴史的方法と社会改良への熱意の高まりという時点・見地からマーシャルは経済学の発達を概観し、「人間生活の質的向上に役立つような知識を追究するという近代的な目標を経済学に与えた」重農主義者、スミスの天才、等々を論じた後、「体系的な計画による歴史の比較研究という考え方を真に理解したものはいなかった」と古典派を批判している。そして、経済学者の「フランス派」に言及し、「アメリカ派」について「経済の実際面で確保しているような指導的地位を、経済思想の面でも達成するであろう」とした後、ドイツの経済学について次のように述べている。「近年ヨーロッパ大陸でなされた経済学上の業績のうち、最も重要なものはドイツのそれである。…ドイツ人は経済史においても「比較史」研究の先鞭をつけた。…この学派の指導者とその国外の協同者たちが、経済的な慣習と制度の歴史を跡付け説明するために企てた仕事の価値は、いかに高く評価しても誇張というに当たらない。これは現代の偉大な業績の一つであり、真実の富への重要な追加でもある」（Marshall 1961, 767-68 / 訳 I, 181-83）。

マーシャルは一面でリカードと彼の追隨者に批判的であった。議論の単純化のために、彼らはしばしば人間を不変のもののみなし、人間の多様性を研究するために十分な労をとろうとしなかった。「イギリスの法律家がイギリスの民法をインド人に押しつけたのと同じような知的習癖によって、イギリスの経済学者は暗黙のうちに世界はシティの人間によって形成されているという想定にたって理論を展開した³⁾。」彼ら旧派の経済学者の最大の欠陥は、産業・勤労の慣習や制度がいかに変化しやすいかを理解しないことであった。彼らは、貧しい人々の貧しさの原因だとされる弱点・非能率が、貧しさの結果であることに気づいていなかった。彼らは、「現代の経

3) バジヨットは「イギリス経済学の基本公準」で次のように述べている。イギリスの経済学は「実業の科学」(science of business) という方がよく、人間はビジネスの動機によってのみ動く想定している。物をつくる人間は誰でもそれをお金のためにつくる。そして、いつも最小のコストで最大のものをもたらすような物をつくと想定している。「単純化のために」そうするのであり、イギリスの経済学者は「実際の人間でなく、架空の人間について」語っている。我々が「実際に見るような人間でなく、そのように仮定することが便利であるような人間について」語っている (Bagehot 1876, 217-18)。これはラスキンの古典派経済学、マーカントイル・エコノミーに対する批判にも通じるものであろう。マーシャルは、バジヨット『イギリス経済学の基本公準』の学生版への“Preface”で、リカードの推論の仕方が実際に持つ意味をバジヨットほど適切に示せる人はいないと書き、「文章体の師であり、実際問題の指導者であるバジヨット」を表現形態において模倣しようとしたようである (Hutchison 1953, 87 / 訳 (上) 79)。マーシャルが『経済学原理』冒頭の一節を、「経済学は日常生活を営んでいる人間に関する研究である」としたことの意味は大きい。

済学者が抱いている労働者階級の生活状態の巨大な改善可能性に対する信念を抱いていなかった。」最近 50 年間における人間の性格の変化には目覚ましいものがあった。19 世紀初頭には数理的・物理的な科学のグループが主導的であったが、世紀が進むにつれて生物学的なグループが台頭し、有機的成長の性質について明確な観念をもつようになった。それは倫理・歴史諸科学にも大きな変化をもたらし、経済学もその例外でなく、「人間性の柔軟さと、人間の性格が現行の富の生産・分配・消費の方式に影響し影響される仕方にますます多くの関心を払うようになった。」そして、この新しい傾向の最初の重要な表現がミルの『経済学原理』に見出されるようになった (Marshall 1961, 762-64 / 訳 I, 173-77)。

マーシャルの経済学史の詳細は今後の課題であるが、概括的にいって、その一つの目標は、『経済学原理』を冒頭の一節、すなわち、「経済学は日常生活を営んでいる人間に関する研究である」、「経済学は一面において富の研究であるが、より重要な側面においては人間の研究なのである」、で始めることにつながる歴史のように思われる。これはこの時代の他の経済学者の場合にも通じることであったように思われる。

マーシャルとカニンガムの確執・方法論争についてはしばしば指摘されてきた。歴史に対するマーシャルの深い関心と理解にもかかわらず、経済学（理論）と歴史の関係について、マーシャルとカニンガムはまったく異なる見方をしていた。マーシャルにとって経済学は歴史を理解するための基礎であり、歴史の分析用具を提供するのだが、経済史は歴史理解の一助に過ぎなかった。あるいはカニンガムのマーシャルに対する攻撃は、「他には関心のない専任の専門家以外の者が、経済史という主題を取り扱う僭越を憤る職業的なセクト主義または組合主義を示すもの」であった (Hutchison 1953, 69 / 訳 (上) 81-82)。こういう敵愾心は経済史という専門分野の制度的な自立・独立を促したであろうが、それは形式的・制度的には経済史、とくに経済学史を経済学者の関心の「周辺」に追いやることになった。経済学が大学における制度として自立する経済学トライボス (1903 年) の科目表で、経済史は第一部に「近現代の経済史及び一般史」があるだけで、案の時にあった「経済学説史」は科目表からなくなっている (西沢 2007, 154-55)。マーシャルが『経済学原理』の第 5 版 (1907 年) 以降、経済史、経済学史を付論にするのは、『原理』の構成を確立するうえでおそらく無理のない選択であったのであろう。ピグーがマーシャルを継いで経済学教授になったことは、経済理論と経済史、経済学と歴史を制度的に分離する過程をさらに進めることになった。

マーシャルとケンブリッジの経済学の多くが当面、経済学史から離れていったように、カニンガム『イギリス商工業の発達』もその第 3, 4 版 (1903 年, 1907 年) では、第 2 版 (1990-92 年) では重視していた経済学史の論述の多くを削ることになった。そして自立していく経済史学の中かで経済学史には何の役割もなかった (Backhouse 2004, 114-15)。マーシャルは確かに制度的に、そして書物の構成上、明らかに経済史、経済学史としてくれるものを付論にまわしたが、歴史と分析を総合的に考える彼の立場は、「一つのもののなかに多くのことを、多くのことのなかに

一つのものを」という『産業と商業』のモットーにもよく表われている。マーシャルにとって、「本来の」経済学は、後に「応用経済学」と呼ばれるようになったもので、「原理」と呼ばれるようになったものは、「本来の経済学の非常に小さな部分」であった（Hutchison 1953, 71 / 訳（上）84）。

マーシャル、フォクスウェル、ピグー ケンブリッジの経済学トライポスで経済史の関連科目は少なく、経済学説史は科目表からなくなった。マーシャルは分析的で科学的な経済学をケンブリッジで確立していくためには妥協がなく、カニングムとの闘いにもみられるように同僚の仕事にも介入した。マーシャルとフォクスウェルは、経済学トライポス形成のために緊密な協力をし、彼らの経済学の講義は補完的であった。しかし、彼らの経済学の理念と方法は大いに異なり、それは1903年以降顕在化した。マーシャルはフォクスウェル宛てに、「本や冊子が貴兄を大いに喜ばせる時、貴兄はそれを「学問的」と言います。他方、私の方は完べきに「科学的」だと思われぬものは何であれ、私を大いに興奮させることはありません。…貴兄が事実に関する正確さにより大きな重点を置くのに対して、私の方は困難な分析および推論に取り組むことをより強く主張します」（12 Feb. 1906: Whitaker 1996, III, 126）。マーシャルはカリキュラムの編成で、フォクスウェルを経済学の主流からはずし、経済史、経済学説史、社会主義のような科目に移そうとした。フォクスウェルの講義はLondon school 風で、ケンブリッジの3年次にふさわしいとマーシャルは考えなかった。マーシャルは、経済学への歴史的接近に対するフォクスウェルの熱狂を共有できず、彼の専門とする経済学説史・経済思想史は、マーシャルにとって二次的な科目であり、「選択科目」であった。マーシャルは、経済学教育を「歴史的で文献的な観点とは違った科学的な観点から扱う」ことを願い、「ピグーに自分の欲するものを見出した。」このことは、ピグーのキングズ・カレッジのフェローシップ申請の際にも顕著であった（西沢 2007, 168-73）。

マーシャルの後任の経済学教授職への候補者はアシュリー、キャナン、ピグー、フォクスウェルで、マーシャルの望み通りにピグーが選出された。フォクスウェルは自分の選出を信じて講義ノートの準備を始めてさえた。選挙結果について、「この選挙はCambridge school of economicsを、エッジワースがOxford schoolをそうしたのと同じ水準の無気力に追いやるでしょう」と評議員の一人は書いたという（Coats 1972, 493-94; 西沢 2007, 177）。

フォクスウェルに対するマーシャルの態度、マーシャルによる彼自身のCambridge school of economicsを形成しようとする意図は、「第二の教授職」をめぐる議論のなかでさらに明瞭になった。ピグーが教授職に選出された後、フォクスウェルの教え子で友人のヘンリー・ヒッグズは、フォクスウェルのために教授職（a personal chair at Cambridge）を設立するための募金をしようとした。これに関連してマーシャルは、ケンブリッジの仕事、とくに経済学トライポスの新しい特徴に関する仕事について、フォクスウェルが適当かどうかについての判断が、ヒッグズと大きく違うとネヴィル・ケインズ宛てに書いた。そしていわく、「もし、第2教授職がクラッパムに行くべきかフォクスウェルに行くべきかという問題が生じたら、私はクラッパムを支持せざるを得ません。

…フォクスウェルが依然として最盛期にあるとしても、クラップムと同じ知的水準に置くことは躊躇うでしょう」と (13 Dec. 1908; Whitaker 1996, III, 215).

V イギリス歴史学派と社会改良の経済思想史

クリフ・レズリーとイングラム ラブレーが示したヨーロッパ的規模での歴史学派の興隆は、多くの同時代人によって指摘された。アイルランドの経済学者イングラムは「経済学の現状と展望」という F 部門の会長講演 (1878 年) で、この古典派経済学とくにリカード経済学の演繹的方法に対する「ヨーロッパ的規模での反抗」について述べた。イングラムはさらに『エンサイクロペディア・ブリタニカ』(第 9 版, 1885 年) に 55 ページにおよぶ「経済学」の項目を執筆し、ドイツ、イタリア、フランス、イギリス、およびアメリカの「歴史学派」を論じた。これを大幅に改訂増補して出版されたのが、『経済学史』(1888 年) であった。それはおそらくイギリスで最初のまとまった『経済学史』の単著であり、歴史学派が国際的に波及するなかで日本語を含む 9 か国語に翻訳されて広く読まれた。

バジヨットがリカード経済学の「特異性」を批判し、理論の世界でジェヴォンズ革命が進むなかで、方法論的な挑戦をし、イギリス歴史学派の基礎を敷いたのは、アイルランドの経済学者クリフ・レズリーであった。ヨーロッパとインドの土地制度の比較研究から生まれたヘンリー・メインの歴史法学に刺激され、植民地アイルランドが直面する社会経済問題の解法を求めるレズリーの営為はリチャード・ジョーンズの伝統を復活させ、イギリスにおける方法論争を導いた。1870 年代に「経済学者の帰納・歴史学派」あるいは「歴史派経済学者」の運動の最前線にいたのは、イギリスではレズリーであった。彼は 1870 年に「アダム・スミスの経済学」を書いて、経済理論に国籍はなく自然法則に基づく普遍的な真理だとする方法論を批判し、スミスの富の経済学を貫いているのは「経験哲学、帰納的研究と自然仮説から引き出される演繹的思索の結合」であると論じた。その後も「経済学の哲学的方法」(1876 年)などで、経済学は歴史学的であるべきで、社会の歴史的進化の過程における経済的側面と他の諸側面(道徳的・知的・法的・政治的諸側面)との結びつきが追究されるべきことを論じた。また「経済世界における既知のもの」と未知のもの」(1879 年)は、「完全知識」, 「十分な知識という仮定の限界を強調した」ものとして、後にテレンス・ハチスンにも高く評価された(西沢 2007, 40-47)。こうしたレズリーの著作は、方法論、経済学への貢献という面が強く、経済学史・経済思想史を形にしたのはイングラムであった。

1870 年代の歴史主義的・倫理主義的批判の経済学は、レズリーと同郷のイングラムによってより包括的に展開された。コントの実証主義哲学の影響を強く受けたイングラムは、経済現象を他の諸側面との関連で捉える必要を説き、経済学より広い一般社会科学、あるいは社会学のなかで有効に理解できると考えた。彼によれば、経済現象は、暫定的に以外、孤立化することはできず、他の諸側面との依存・相互関係において考察されるべきで、とりわけ経済活動が従う道徳的

問題を視野にいれなければいけない。個人主義的な見方は社会的なそれに従属すべきで、個々の主体は社会の一部分であった。富は主観的な効用から考えられてきたが、富は社会の持続的な進化のためにあり、富の研究は他の社会的諸側面から切り離せず、人間生活の諸側面とのつながり・相互関係のなかで把握される。経済科学は「カタラクティクスよりもはるかに大きなもの」で、市場・交換を超えた有機体のなかで考えるべきであった。さらに、「科学からあらゆる神学的・形而上学的要素を取り払わなければならない、その動きを妨げゆがめる傾向のあるものを取り払わなければならない。一方では神学と楽観主義、他方では「自然的自由」と「奪うことのできない権利」という jargon は、最終的に放棄されなければならない」のであった。それに代わって、経済学は社会学というより大きな科学の一つの分野を形成する経験科学にならねばならず、他の諸分野および「全知的体系の冠たる道徳的統合」との緊密な結びつきをもたねばならないのであった (Ingram 1888, 1919, xvii-viii, 295-300)。

イングラムの『経済学史』(1888年)は、構成からしても、「自然的自由の体系」・古典派経済学を相対化し、歴史学派の妥当性を主張することがねらいであったように思われるが、かなり包括的である。短い序章の後、第2章 古代、3章 中世(13世紀まで)は、経済現象が十分な広がりをもたない未発達な状態として簡略に描かれる。続いて、近代は3期(3段階)に分けられ、第4章で第1期「中世の封建制の崩壊」、第2期「重商主義の興隆」が扱われ、第5章で近代第3期の「自然的自由の体系」が詳細に論じられる。アダム・スミス以前(フランス、イタリア、スペイン、ドイツ、オランダ)と、アダム・スミスおよびその直前の先行者とその信奉者が、イギリスについて詳細に、そしてフランス、アメリカ、イタリア、スペイン、ドイツと国別に論じられている。そして第6章が「歴史学派」で、短い総論の後、ドイツ、イタリア、フランス(ラブレーを含む)、イギリス、アメリカという5つの章からなり、後の改訂増補版(1919年)には、イーリーの序文とともにウィスコンシンのイーリーの同僚 W. A. スコットによる追加の第7章「オーストリア学派と近年の発達」が付されている。

イーリーによれば、イングラムの生涯を鼓舞した大きな動機は人間性であり、彼の情熱は「一般的な福祉」であった。コントの人間性の宗教を信奉し、彼の活動はすべて人間福祉の増進に関わるものであり、経済科学もその手段であった (Ingram [1888] 1919, xv)。イングラムは『経済学史』を次のように結んでいる。「社会の経済的再建は、物的よりも知的・道徳的な刷新を意味し」、ヨーロッパ社会が苦闘している産業の改革は、「生活の応用術 (applied art of life) の一部であり、全環境を修繕し、全文化に影響し、全行為を規制する — 要するに、全資源を人間性 (Humanity) の保護と発展という大いなる目標にむける」ことである、と (ibid., 300)。この時期の歴史派経済学者が追究したことには、工業化と経済成長のなかで失われた人間性の回復、古典派経済学者による経済学の範囲の限定、経済現象を社会の諸現象から引き離し、経済的合理性を目指す利己的経済人を想定し、全人的人間から経済的人間を引き離して取り扱うことに対する批判があった。自然的自由の体系・古典派経済学への反抗として台頭してきた主張、経済学の倫理化あるいは社会化は時代の著しい傾向であった。「経済学をもって日々の生活における人間の研究となす所の

マーシャルの定義は広く人口に膾炙^{かいしや}していた」(上田 1987, 234-35)。

これは上田辰之助の言であるが、イーリーもイングラムの『経済学史』への序文でおよそ次のように述べている。イングラムは、経済学に humanitarianism を持ち込むことに成功した人たちのグループの指導者であった。イングラムは十分に役割を果たしたのであり、それがいかに成功したかはマーシャルの『経済学原理』第1編第1章に明瞭に表れている。そこでは、経済学は富の研究であると同時に人間の研究の一分野であり、「貧困が避けられないかどうかという問題は経済学にとって最大の関心事である」と書かれている (Ingram [1888] 1919, xiii)。

オクスフォード・エコノミスト

アーノルド・トインビーと L. L. プライス イングラムは『経済学史』の終章「歴史学派」のイギリスの節を次のように結んだ。「オクスフォードで経済思想上、実質的にトインビーと同じ見地にたつ一群の人々が増大していることが事実なら、それは科学の将来にすばらしい前兆である」(Ingram [1888] 1919, 229)。30歳という若さで病死したオクスフォードの「熱情的社会改良家」トインビーは「使徒アーノルド」と呼ばれた。「鋭敏で烈しく共感し、禁欲的なほどに愛他的である」トインビーの人間性と社会的影響力は、イギリスの経済学者にも類例がなかった (Foxwell 1887, 93-94)。著名な論文「イギリスにおける経済学の動向」(1887年)でフォクスウェルも言うように、彼はオクスフォードで一つの学派をつくるような影響力をもった。イギリス歴史学派の大学における拠点はおクスフォードであり、「19世紀末のオクスフォード・エコノミスト」がその主役であった。そのなかには、やがて LSE で活躍する経済学者キャナンやヒュインズもいた。

オクスフォードにおけるトインビーの最も優れた学生の一人であったアシュリーは、1881-82年にトインビーのイギリス産業革命の講義に強い影響を受けた。彼にとってトインビーは「経済学の研究と教育における最大の刺激の源泉」であった。古典派経済学が衰退し経済学が危機にあったときに、新たな関心と信頼のもとに、社会経済問題の解決に経済学が有効であるという希望をつくりだしたのはトインビーであり、彼こそ「イギリスの経済学における新しく豊かな発展の創始者」であった (Ashley 1900, 429)。トインビーによる産業革命の講義は基本的に経済史であったが、経済思想史が多分に織り込まれ、社会改良の経済社会学的接近と言えるようなものを示していた。その前半(1-6章, 8-9章)はイギリス産業革命の諸側面を扱う社会経済史であるが、後半(7章, 10-14章)は、「重商主義とスミス」、「マルサスと人口法則」、「賃金基金説」、「リカードと地代の増大」、「経済進歩についての二つの理論」—リカードとヘンリー・ジョージ、「労働者階級の将来」などの章があり、補論に「リカードと旧派の経済学」、「ヘンリー・ジョージの『進歩と貧困』に関する講義」などがあった。イギリス歴史学派といっても、ベイリオルの講師トインビーとドラモンド講座の教授サロルド・ロジャーズの間には大きな違いがあった。ロジャーズの『イングランドの農業および物価史』は、穀物と賃金を中心とする大部の統計的著書であるが、古典派の伝統で自由貿易・穀物法廃止に帰着するところがあった。

トインビーの急逝の後にオクスフォードに招聘されたマーシャルの教えを受けたL. L. プライスも、有力なオクスフォード・エコノミストであった。プライスはトインビー・トラストの委員であったマーシャルの推薦でトラストの最初の講師職を得た。ニューカースル地域の賃金制度の実態を詳細に調査し、双方独占の労使双方が相対的に公正だと考えるように賃金が調整される産業の様々な状況についての研究をまとめ、マーシャルの序を付して出版されたのがトラストへの報告書『産業平和—その利点、方法および困難』（1887年）であった。プライスは、オクスフォードの拡大講座での講義をもとに『イギリス経済学史—アダム・スミスからアーノルド・トインビーまで』（1891年）をまとめた。版を重ね邦訳もされたこの本は、スミス—分業論、マルサス—人口論、リカード—地代論、ミル—価値論、ケアンズとクリフ・レズリー—経済的方法、バジヨット—貨幣市場、ジェヴォンズ—統計学、フォーセットとトインビー—社会改良、という構成になっている。副題に見られるように、歴史上の経済学者の扱い方・焦点のあて方に特徴はあるが、取り上げられている経済学者を見ると、形式的にはほぼ標準的な経済学史の通史になっていると思われる。プライスは後にオクスフォードで最初の経済史講師（1907年）、そして准教授（1909年）になった。経済史教授職は遅れて1931年にG. N. クラークが就いた。

アシュリーによれば、「近代社会主義にはっきりと善の要素を認め、国家の機能の注意深い拡大に最も有効な革命の防止策」を見たトインビーは、歴史的方法と社会主義の有効性を積極的に認めた点で、ドイツ社会政策学会の「講壇社会主義者」に近かった（Ashley 1900, 436）。トインビーの思想は、ウェップ夫妻やハモンド夫妻、R. H. トーニー、G. D. H. コールのようなフェビアン社会主義者、イギリスの社会政策学派にも少なからぬ影響を及ぼした。トインビーの『イギリス産業革命史論』は、彼の死の翌（1884）年に、アシュリーとキングによる講義ノートをもとに出版され、若いオクスフォード・エコノミストや社会改良家にむさぼるように読まれた。それは、ロンドンにおける貧困の暴露、『ロンドンの見捨てられた人々の悲痛な叫び』（1883年）の時代であり、「社会的病苦としての貧困の認識が、1880年代の発見として広くイギリス人の精神を襲った」（Hobson 1929, xi-xii）時期であった。「自由競争は富を生み出すが福祉を生み出さないことを産業革命の帰結は立証した」のであり、それは富の増大と共に貧困の増大、生産者大衆の窮乏化をもたらす社会革命であったとするトインビーの議論は、その後、ハモンド夫妻に受け継がれ、悲観論的・断絶的産業革命論の原型になった。社会改良の方途としての経済史・思想史研究がイギリスで普及することになり、トインビーは20世紀の経済史・社会史・思想史研究に不変の重要性をもつことになった。トインビーの産業革命史研究の理念は、ウェップ夫妻、ハモンド夫妻、トーニー、コールのような経済史・思想史研究の「改革派」（reformists）グループを生み出し、数量的、倫理中立主義的、そしてマーシャルの新古典派的方法で経済史研究を進めるクラッパムのような「中立派」（neutralists）グループとは別の経済史・社会史研究の伝統をイギリスにつくることになった（Coleman 1987, 62, 64-65）。

アシュリー：経済学と歴史の狭間で トインビーの思想に強い影響を受けドイツ歴史学派の

学問を指針としたアシュリーは、「最も有望で優れたイギリス歴史派経済学者」（Koot 1987, 102）であった。アシュリーの学者としての地位を確立した『イギリス経済史および学説序論』の第 1 部「中世」の初版は、イングラムの『経済学史』と同じ 1888 年に出版された。しかし、経済学教育の制度化が遅れるイギリスでアシュリーはポストに就くことができず、同年トロント大学に新設された政治学科の経済学・法制史教授としてカナダに赴くことになった。こうして彼は新大陸に渡り、その 4 年後にはハーヴァード大学に招かれて英語圏で最初の経済史教授になった。

アシュリーがトロントに着任して約 2 年半後の 1890 年 10 月、サロルド・ロジャーズが死んで、オクスフォードのドラモンド講座の経済学教授職が空席になった。このポストにはエッジワースが就くのであるが、アシュリーもこれに応募した。アシュリーのドラモンド講座への応募には、ブレンターノ、セリグマンの他、世界の著名な歴史派経済学者から数多くの推薦書が寄せられた。クニース、シュモラー、コーン、ラプレー、コッサ、および経済史家のシーボウム、メイトランド等々である。ここには歴史学派の国際的波及の一端が窺われるし、実際、アシュリーは当時のオクスフォードの必要にふさわしい候補者であったかもしれない。しかし、アシュリーはイギリス国内の主流派経済学者から支持を得ることができず、『エコノミック・ジャーナル』の編者となるエッジワースが選出された。オクスフォードの経済学教授職は、トインビーの伝統を継ぐオクスフォード・エコノミストの学風とは異質のエッジワースが占めることになった（西沢 2007, 74-76 参照）。反主流の歴史派経済学者がイギリスの大学で経済学の専門職を得るのは、総じて 1895 年の LSE の創設以降であった。1885 年にマーシャルがケンブリッジの経済学教授職に就いたときに、カニンガムも候補者であった。カニンガムとマーシャルの論争・確執が及ぼした影響は別途掘り下げる必要があろうが、確執の過程で経済学と経済史はますます独立の分野として成立していき、そのなかで境界領域の経済学史・経済思想史の役割は縮小して、クラップムのような経済史研究において経済学史はもはや何の役割も担わないことになった（Backhouse 2004, 114-15）。

イギリス歴史学派を代表するアシュリーの学問を受け入れたのは、後発資本主義国アメリカの大学であった。制度化・制度形成は後発国が早く、1885 年にはドイツ帰りの若い学徒を中心にアメリカ経済学会が創設され、翌年にはハーヴァードのダンバーを中心に英語圏で最初の経済学雑誌 *Quarterly Journal of Economics* が創刊された。ハーヴァード着任の翌年に、『イギリス経済史および学説』第 2 部が公刊され、それはカニンガムの『イギリス商工業の発達』（初版 1882 年；第 2 版第 1 巻 1890 年、第 2 巻 1892 年；第 3 版第 1-3 巻 1896-1903 年）とともに、「イギリス経済史と考えられている新しい学問分野の勝利」を画することになった（Clapham 1927, 680）。この勝利は、しかし、経済史が経済学者の関心の「周辺」と見られるようになることを意味した。アシュリーは、多くの経済史家と違って、経済研究を理論、応用、歴史に区分することに賛成でなく、経済史を経済学者の関心の「周辺」とみなすことに同意できなかった。1926 年のイギリス経済史学会の創立集会の部会で、アシュリーは「大学の研究における経済史の位置」という報告をし、この論文は *Economic History Review* の創刊号の巻頭を飾るのであるが、そこで彼は次の

ように述べている。「理論経済学者は、我々経済史家に我々だけの小さな庭地を与えて満足させようとしている。そして我々控えめな歴史家は、小さな争う余地のない領域に感謝するあまり、経済学者を彼らの思いのままにさせておく傾向がある。現在提案されている独立の学会と EHR の創刊も、両者を疎遠にする危険があるかもしれない」(Ashley 1927, 4, 8-9)。アシュリーの危惧は現実になったように思われるが、彼は、歴史派経済学者の批判的攻撃が経済史という新しい領域となって平和裏に分離されていくのを見届けて、翌 1927 年に生涯を閉じた。

アシュリーは、トロントとハーヴァード在職中に経済学の歴史的方法の重要性を論じ、1900 年に *Surveys, Historic and Economic* を公刊した。それはシュモラーに捧げられ、長い献辞には次のようにある。「長年にわたって、私は他の誰よりも貴兄の著作から多くの刺激と励みを受けてきました。励みといたしますのは、…歴史家であると同時に経済学者であろうとする努力に対してです。貴兄はいかにして歴史家の精神を経済学者の仕事に持ちこみ、また経済学的な興味を歴史家の著作に持ちこむかということをご自身で示しています」(Ashley 1900, v)。アシュリーはもちろん狭義の経済史家ではなく、帰納的な研究のうえに体系的な歴史的経済学を構築しようとする「独創的なイギリス歴史派経済学者」であり、言葉の適切な意味で「政治経済学者」であった (Koot 1980, 175; Clapham 1927, 679)。アシュリーは、イギリスの経済学者のなかでドイツ歴史学派にもっとも近い存在であった。シュンペーターによれば、アシュリーの思想と行動は「イギリスの経済学者の他の誰よりも当時のドイツの経済学専門家のタイプに合致していた。…その著作——たとえば産業に関する見事なモノグラフ、および非常に成功した『イギリス経済史および学説序論』やその方法論的発言、また社会政策および経済的ナショナリズムに対する共感などにおいて、ドイツの経済学専門家のタイプに忠実な態度をとった」(Schumpeter 1954, 822 / 訳(下) 136-37)。

アシュリーの『イギリス経済史および学説序論』の第 1 部は「中世」(11 世紀から 14 世紀まで)、第 2 部が「中世の終焉」(14 世紀から 16 世紀まで)で、第 1 部はトインビーに捧げられている。その第 1 部「中世」第 3 章「経済学説と法律」ではアキナスの「公正価格論」や「利子論」が論じられ、第 2 部「中世の終末」第 6 章は「教会法学者 Canonists の学説」を扱っている。ブレンターノに学んだ福田徳三も「トマス・ダキノの経済学説」を中心とする「基督教経済学説研究」を書いたが、それは中世キリスト教神学者および教会法学者(「スコラ」哲学と「カノニスト」法学)の経済学説研究であり、そこで志向したことは「ブレンターノ先生の『歴史上の倫理と経済』およびアシュリーの英国経済史の賜」であった(福田 1925, 785)。福田の論文「トマス・ダキノの経済学説」は、当時のヨーロッパにおける社会思想の潮流のなかで現われた一種の「時代の子」だという(上田 1987, 591)。それは 17 世紀以降の近代資本主義、自由主義経済の批判であり、「獲得社会」・財産権を優越させる工業文明、個人主義経済学の批判であり、財の人間の評価の復興であった(*ibid.*, 203)。

自由主義・個人主義経済学への反抗として台頭してきた主張、経済学の倫理化もしくは社会化、経済社会学の構想は時代の著しい傾向であった。繰り返しになるが、「経済学をもって日々の生

活における人間の研究となす所のマーシャルの定義は広く人口に膾炙していた。経済学における倫理化運動の主なる原動力の一つは中世社会理想への回帰であった。アシュリー、ヒュインズ、カニングムのようなイギリスの歴史派経済学者もそうであった。社会経済学を提唱するカトリック系の経済学者やラスキン、モリス、カーライル等の中世主義者、およびイギリスのギルド社会主義者など、中世教会の標榜した精神的経済文化の思想がヨーロッパの社会思想の一潮流をなしていた。産業革命・工業化以降の功利主義的な資本主義文明に対する批判は広く共有された。何が中世主義に人々の心を引きつけるかといえ、*「総合的人間価値の高揚」*であった（上田 1987, *ibid.*, 234-35）。

アシュリーによれば、15世紀の晩年は「完全で体系的な経済学説」、*「相互に関連した部分、経済生活のあらゆる側面に関わるまとまった教え」*が現れたことで顕著であった。15世紀の教会法学者の学説は、*「連絡の無い諸意見の集合ではなく、首尾ある全体」*であった。それは「科学」というよりも「アート」たることによって19世紀末以降の経済学とは違っていた。それは、行為・行動についての「規範あるいは処方箋」であって、事実からの結論ではなかった。この意味の「アート」は「科学」に頼るが、教会法学者が頼る科学は神学であった。中世の教会法学者とドイツ歴史学派の影響を受けたイギリスの経済学者との間に共感の環があるとすれば、その絆ははるかに強く、彼らの経済学は、物質的利益・利害は人間の発展というより高い目的に従属するものであることを認めているからであった（Ashley [1888] 1893, Part 2, 379-81）。

アシュリーはトロントやハーヴァードの教授就任講演で、ドイツ歴史学派が引き起こした新しい経済学の運動の成果と、イギリス古典派経済学すなわち旧派の経済学の特異性を強調した。歴史学派の運動は経済学者の精神的態度を変え、*「経済学の結論は一定の条件に対して相対的なもので、仮説的妥当性をもつだけである」*ということが、経済学者の知的営為の一部になった。アシュリーはマーシャルの『経済学原理』とワグナーの『経済学教科書』を当時のもっとも重要な文献だと述べている。マーシャルの『原理』は、*「著者の名声とイギリスの経済学者の第一人者としての地位にふさわしい著書であり、J. S. ミル以来のイギリスで書かれたほとんどすべてのものを背後に追いやるものであった」*。それは「異なる学派に調停のメッセージを送り、*「演繹的」*および「歴史的」、*「科学的」*および「倫理的」経済学者が強調してともに仕事をするを可能にした」（Ashley 1891, 489）。

後にアシュリーは、バーミンガム大学商学部の教授として産業・企業の経済学を構想する際にマーシャルの『産業と商業』を非常に高く評価した。*「広範な領域を扱った大家の名に恥じない学識豊かな研究としてマーシャル博士の『産業と商業』を指摘するのを抑えることはできない。我々の何人かが何年もの間、断片的な材料を掘り起こそうとしてきたこと、未開拓の土地を耕しているような気分で学生に授業をしてきたことが、そこにおいて初めて総合的な見解のもとにまとめられた。本のモットーである「一つのものの中に多くのことを、多くのことの中に一つのもの」*は、我々の共通の理想であり、それは抽象と具体の調和、さらに双方とも同等に必要

であるものの調和を意味している」(Ashley 1926, 151-52)。

アシュリーの『イギリス経済史および学説序論』第1部の序文は次のように結ばれている。「歴史学派」の人々が増えているが、彼らが追求すべきものは社会発展についての法則、社会の経済生活が実際に動く発展諸段階についての一般化であり、その知識が過去への洞察だけでなく現代の諸問題の理解も助けるのである (Ashley [1888] 1893, Part 1, xii-xiii)。アシュリーは経済の発展とともに、経済学・経済思想の発展に強い関心を持ち、ハーヴァードにおいてもプラトン、アリストテレスからマルクスにいたる経済思想史を講じ、「経済学古典叢書」を企画し、自らは広く読まれ長い間定番となったJ. S. ミルの『経済学原理』の編集出版をした。ハーヴァード在職中、アシュリーの関心は17-18世紀からしだいに同時代の社会経済問題に移行していった。1896-97年の彼の講義は重商主義に重点が置かれ、1896年にシュモラーの『重商主義体系とその歴史的重要性』(1884年)を翻訳し、1897年には「自由貿易政策のトーリーの起源」を公刊している。こうしてアシュリーは、母国のヒュインズやカニングムと軌を一にして重商主義という国民的経済思想・経済的ナショナリズムの復興をするのであるが、1901年の秋に新設のバーミンガム大学商学部を開設するためにイギリスに戻った彼は、やがてヒュインズとともにチェンバレンの関税改革運動の主要なブレーンになるのであった(西沢 2007, 86-88)。

歴史派経済学者がまず手がけたことは、経済生活の多様さを示す歴史的資料や記録、経済文献を集め、それらの生成発展の順序を明らかにすることであった。自然的自由の体系はそのままではうまく機能しなくなっており、歴史の画期に対してこれまでとは違った評価が与えられた。共同体の規律、経済活動の道徳的規制が重んじられた中世が再評価され、重商主義の時代も好意的に描かれて、レッセ・フェールが勝利を取った時代に対する評価を逆転させた。トインビーは、産業革命の帰結を非難し、それと「旧派の経済学」を結びつけたが、アシュリーをはじめ、多くのオクスフォード・エコノミストと「LSE 制度主義者」はそれにならった。歴史派経済学者は、経済史・経済思想史と応用経済学のような帰納的研究が、正統派・新古典派の経済理論よりも社会改良と政策形成により適切な指針を与えると考えた。

VI おわりに

フォクスウェルは、経済学というのは論理学や数学の一部門ではなく、「経験の集成全体に健全な推理を適用することによって、公共の問題を処理する技法(アート)」だと考えていたという(Keynes 1972, 272 / 訳 358)。歴史派経済学者アシュリーもこれに近い考え方であっただろうし、オクスフォード・エコノミストの出で、創設時からLSEで経済学を教えたキャンナン、そしてマーシャル自身もこういう側面を多分にもっていたように思われる。この時期の経済学者は相対的に歴史への志向・指向が強く、総じて著作のなかに経済学史を統合的に含めていた。経済史も経済学史も経済学のなかに一定の然るべき位置をもっていた。しかし、経済学・理論が歴史から離れて独自に専門化・制度化し、経済史が同じように自立していくなかで、経済学史は双方にとって

周辺的なものになる傾向があった。

上述のように、フォクスウェル、ヒッグズ、ボナー、そしてキャナンのような経済学者が築いた経済学史・経済思想史研究は、その後、経済史のように制度的に自立することはなくても、LSEでロビンズ、(そしてヒックス、ハイエク)、ハチソン、ケンブリッジではスラッファ、ドップのような経済学者によって発展し、イギリスで経済学史研究は1950年代-60年代に黄金時代を迎えるという。LSEでキャナンに教えられたロビンズは、周知のように、『経済学の本質と意義』(1932年)で科学としての経済学の範囲を限定し、その後の発展に大きな影響を与えたが、経済学の歴史にも大きな関心を持ち多くの著作を遺した。アメリカで1969年に経済学史固有の学術誌 *History of Political Economy* が創刊され、イギリスでも類似の専門的な学術誌の話が持ち上がったときに、ロビンズを含む多くの経済学者は、それは経済学史を経済学から切り離すことになるという理由で反対したという (Backhouse 2004, 118-19, 121)。経済学史は経済学の革新に大きな役割を果たしていたのであろう。

ケインズやハイエク、シュンペーターに顕著なように、経済学史に対する関心の伝統は存続したが、歴史が過小評価される方向で経済学が発達するなかで、そうした姿勢は1930年代にひどいに例外的になった。経済学は科学として数学的な手法を強め、経済学史は修辭的な意味しかもてないようになり、他方で経済史と経済学史も区別化され、そこでも経済学史は取り残された。経済学の専門領域が細分化して狭く限定されていくなかで、歴史的にもそうであったが、境界領域にあった経済学史・経済思想史研究は、周辺に追いやられ、過小評価される傾向が強くなった。経済学史の歴史を振り返って形成期を検証してみることは、経済学(理論)が専門化し制度化する以前にあった流動的な境界領域のなかで経済学史がもった意義・役割を見直すことであろう。経済学史と経済史は統合的に一体化して、経済学と歴史の間の流動的で明瞭に区分されていない境界領域で双方に足をかけて統合的な学問の発達に資していた。経済学の専門分野が分かれて制度化していくなかで、境界領域も変わり、そこにおける経済学史の役割も変わった。

ロビンズは『イギリス古典派経済学における経済政策の理論』(1952年)の最初の講義を次のように始めている。「私が経済学の勉強を始めた30年前、この国の年配世代の経済学者——マーシャル、エッジワース、フォクスウェル、そしてキャナン——は、経済学の学識といえるようなものについて本当に習熟していた。そして、経済思想の歴史を知っていることは、経済学者の装備の望ましい部分だと普通に考えられていた。しかし、その後経過した年月のなかで、そうしたことは皆変わった。多くの研究の中心で、こういう種類の知識は重要でない飾りとみなされるようになり、化学の歴史についての知識が化学者に必須でないように、経済学者にとって本質的でないものとみられるようになった。この展開は私にはいつも残念に思われる。応用分野において…我々現代の問題や政策は、そこから成長してきた問題や政策を遡って知らなければ、理解することができないように思う」(Robbins 1952, 1)。

(西沢 保：帝京大学経済学部)

参 考 文 献

- Ashley, W. J. [1888] 1893. *An Introduction to English Economic History and Theory*, Part 1. The Middle Ages; Part 2. The End of the Middle Ages. London: Longmans. 野村兼太郎訳『英国経済史及学説』岩波書店, 1922.
- . 1891. The Rehabilitation of Ricardo. *Economic Journal* 1 (3): 474–89.
- . 1893. *On the Study of Economic History* (An Introductory Lecture delivered before Harvard University, 4th January, 1893).
- . 1900. *Surveys, Historic and Economic*. London: Longmans.
- . 1926. *Commercial Education*. London: Williams & Norgate.
- . 1927. The Place of Economic History in University Studies. *Economic History Review* 1 (1): 1–11.
- Backhouse, R. E. 2004. History of Economics: Economics and Economic History in Britain, 1824–2000. *European Journal of the History of Economic Thought* 11 (1): 107–27.
- Bagehot, W. 1876. The Postulates of English Political Economy, No. 1. *Fortnightly Review* February 1, 1876, 215–42.
- . 1895. *Economic Studies*, fourth impression, ed. by Richard H. Hutton. London: Longmans.
- Checkland, S. G. 1951. Economic Opinion in England as Jevons Found It. *The Manchester School of Economic and Social Studies* 19:143–69.
- Clapham, J. H. 1927. Obituary. Sir William Ashley. *Economic Journal* 37:678–84.
- Coase, R. H. 1972. The Appointment of Pigou as Marshall's Successor. *Journal of Law and Economics* 15 (2): 473–85.
- Coats, A. W. 1972. The Appointment of Pigou as Marshall's Successor: Comment. *Journal of Law and Economics* 15 (2): 487–95.
- Coleman, D. C. 1987. *History and the Economic Past. An Account of the Rise and Decline of Economic History in Britain*. Oxford: Clarendon Press.
- Collet, C. E. 1940. Obituary: Henry Higgs. *Economic Journal* 50:546–55.
- Collini, S., D. Winch, and J. Burrow. 1983. *That Noble Science of Politics: A Study in Nineteenth-Century Intellectual History*. Cambridge: Cambridge University Press. 永井義雄・坂本達哉・井上義朗訳『かの高貴なる政治の科学—19世紀知性史研究』ミネルヴァ書房, 2005.
- Cossa, Luigi. 1880. *Guide to the Study of Political Economy*. Translated from the second Italian edition, with a preface by W. Stanley Jevons. London: Macmillan.
- Cunningham, W. 1903. 'Preface' (dated 16 Aug., 1903) to *The Growth of English Industry and Commerce*, 3rd ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Foxwell, H. S. Cambridge: 1887. The Economic Movement in England. *Quarterly Journal of Economics* 2 (1): 84–103.
- . 1899. "Introduction" and "Bibliography" to the English translation of Anton Menger's *Right to the Whole Produce of Labour*. London: Macmillan.
- . 1923–26. Economic Libraries. In *Palgrave's Dictionary of Political Economy*, ed. by H. Higgs, Vol. 1, 870–72.
- Goodwin, C. D. 2008. History of Economic Thought. *The New Palgrave*, 2nd ed. Vol. 4, 48–57. New York: Palgrave Macmillan.
- Harte, N. B. 1971. The Making of Economic History. In *The Study of Economic History: Collected Inaugural Lectures 1893–1970*. London: Frank Cass.
- Higgs, Henry. 1905. "Editor's Preface," in Jevons 1905.
- Hobson, J. A. 1929. *Wealth and Life: A Study in Values*. London: Macmillan.
- Hutchison, T. W. 1953. *A Review of Economic Doctrines 1870–1929*. Oxford: Clarendon Press. 長守善・山田雄三・武藤光朗『近代経済学説史』(上)(下), 東洋経済新報社, 1957.
- . 1978. *On Revolutions and Progress in Economic Knowledge*. Cambridge: Cambridge University Press. 早坂忠訳『経済学の革命と進歩』春秋社, 1987年.
- Ingram, J. K. 1878. The Present Position and Prospects of Political Economy. In R. L. Smyth ed. 1962, 41–72.

- . 1888. *A History of Political Economy*, New and enlarged ed., with a Supplementary Chapter by W. A. Scott, and an Introduction by R. T. Ely. London: A. & C. Black, 1919. 阿部虎之助訳『哲理経済学史』経済雑誌社, 1896.
- Jevons, W. S. 1879. Preface to the Second Edition. In *The Theory of Political Economy* (1871), 2nd ed. London: Macmillan.
- . 1905. *The Principles of Economics: A Fragment of Treatise on the Industrial Mechanism of Society and Other Papers*, ed. by H. Higgs. London: Macmillan.
- Kadish, Alon. 1982. *The Oxford Economists in the Late Nineteenth Century*. Oxford: Clarendon Press.
- . 1986. *Apostle Arnold: The Life and Death of Arnold Toynbee 1852–1883*. Durham, NC: Duke University Press.
- Keynes, J. M. 1972. *The Collected Writings of J. M. Keynes*, Vol. X, *Essays in Biography*. London: Macmillan, 1972. 大野忠男訳『ケインズ全集』第10巻『人物評伝』, 東洋経済新報社, 1980.
- Koot, G. M. 1975. T. E. Cliffe Leslie, Irish Social Reform, and the Origin of English Historical School of Economics. *History of Political Economy* 7 (3): 312–36.
- . 1980. English Historical Economics and the Emergence of Economic History in England. *History of Political Economy* 12 (2): 174–205.
- . 1987. *English Historical Economics, 1870–1926. The Rise of Economic History and Neomercantilism*. New York: Cambridge University Press.
- Leslie, T. E. Cliffe. 1888. *Essays in Political Economy*, 2nd ed. Dublin and London: Repr., New York: A. M. Kelley, 1969.
- Maloney, John. 1987. English Historical School. *The New Palgrave: A Dictionary of Economics*, Vol. II, 147–49. New York: Palgrave Macmillan.
- Marshall, Alfred. 1885. "Preface" to *The Postulates of English Political Economy* by the late Walter Bagehot, with a preface by Alfred Marshall. London: Longmans, Green, and Co.
- . 1961. *Principles of Economics* (1890); 9th (variorum) ed., by C. W. Guillebaud, Vol. I Text. London: Macmillan. 馬場啓之助訳『経済学原理』I–IV, 東洋経済新報社, 1965–67.
- Palgrave, R. H. I. 1894–99. *Palgrave's Dictionary of Political Economy*, Vols. I–III (1894–99), and Appendix (1908); ed. by Henry Higgs. London: Macmillan, 1923–26.
- Price, L. L. 1887. *Industrial Peace: Its Advantages, Methods and Difficulties* (A Report of an Inquiry made for the Toynbee Trustees). London: Macmillan.
- . 1891. *A Short History of Political Economy in England from Adam Smith to Arnold Toynbee*, 11th ed. London: Methuen, 1922. 石渡六三郎訳『英国経済学史』日本評論社, 1928.
- Robbins, Lionel. 1952. *The Theory of Economic Policy in English Political Economy*. London: Macmillan. 市川泰治郎訳『古典経済学の経済政策理論』東洋経済新報社, 1964.
- Schumpeter, J. A. 1951. *Ten Great Economists from Marx to Keynes*. London: Allen & Unwin. 中山伊知郎・東畑精一監訳『十大経済学者』日本評論新社, 1952.
- . 1954. *History of Economic Analysis*. New York: Oxford University Press. 東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史』(上)(中)(下), 岩波書店, 2005–06.
- Shirras, F. G. 1941. Obituary: James Bonar (1852–1941). *Economic Journal* 51:145–56.
- Smyth, R. L., ed. 1962. *Essays in Economic Method. Selected Papers read to Section F of the British Association for the Advancement of Science, 1860–1913*. London: Gerald Duckworth and Co.
- Toynbee, A. 1884. *Lectures on the Industrial Revolution of the Eighteenth Century in England, Popular Addresses, Notes, and Other Fragments*, Together with a Reminiscence by Lord Milner, 6th Impression. London: Longmans, 1920. 吉田巳之助訳『英国産業革新論』大日本文明協会, 1908. 原田三郎訳『イギリス産業革命史』創元文庫, 1953.
- Whitaker, John K., ed. 1996. *The Correspondence of Alfred Marshall, Economist*. Cambridge: Cambridge University Press. (Vol. I Climbing, 1868–1890; Vol. II At the Summit, 1891–1902; Vol. III Towards the Close, 1903–1924).
- 井上琢智. 1987. 『ジェヴォンズの思想と経済学—科学者から経済学者へ』日本評論社.

- 上田辰之助. 1987.『上田辰之助著作集』2『トマス・アキナス研究』みすず書房.
- 佐々木憲介. 2013.『イギリス歴史学派と経済学方法論争』北海道大学出版会.
- 西沢 保. 2007.『マーシャルと歴史学派の経済思想』岩波書店.
- 福田徳三. 1925.『福田徳三 経済学全集』第3集『経済史経済学史研究』同文館.

The Formation of the History of Economic Thought Studies in Britain, 1870s–1920s

Tamotsu Nishizawa

Abstract :

This paper examines the history of economic thought studies in Britain in the age of neoclassical and historical economics from 1870 to 1914 (and thereafter). The historicism and historical methods of this age appeared to be behind not only the making of economic history but also the formation of history of economic thought studies. Economic history, after taking off in the last quarter of the 19th century largely because of the foundation of the English historical school, formation of the Economic History Society presided by W. J. Ashley, and issue of the *Economic History Review* in 1927, is institutionally separated from the Royal Economic Society. What was the history of economic thought?

In the decline and fall of English classical political economy, a new cohort of economists such as Cliffe Leslie, Ingram, Bagehot, and Jevons asserted themselves. They opposed the methods of the classical school, particularly Ricardo's economic reasoning, and their unorthodox literary review sought the free examination of new opinions and theories. Bagehot's *Postulates* was "a landmark in the history of economics," Jevons was "the first of the distinguished tribe of economic bibliomaniacs," and Foxwell first caught the affliction and then made economic library with the "most splendid" work ever to be collected. The rise of a new cohort of economists and the activities and works of Jevons and Foxwell were the foundations of the history of economic thought. Jevons "discovered" Cantillon's *Essai* and Higgs conducted studies of Cantillon and Physiocrats, while Jevons wrote a history of mathematical economics and utility theory. Foxwell's collection of economic literature provided a thoroughly historical edition of the *Wealth of Nations*. This was completed by Cannan, preceded and helped by Bonar's *Catalogue of the Library of Adam Smith* as well as John Rae's *Life of Adam Smith*. Bonar also wrote two books on Malthus.

Toynbee's *Industrial Revolution*, economic history integrated with the history of economic thought, generated a "reformist" group of economic and social historians. Ingram's *History of Political Economy* was a systematic study from a Comteian perspective; he was a leader among a group of men who successfully introduced humanitarianism into political economy or economics. Marshall was among them, and economic history and the history of economic thought were somehow integrated into his economics. However, with the professionalization and institutionalization of economics and economic history, the boundaries between the disciplines of economics and economic history began to be marginalized and the history of economic thought became peripheral to both.

JEL classification numbers: B 13, B 15.